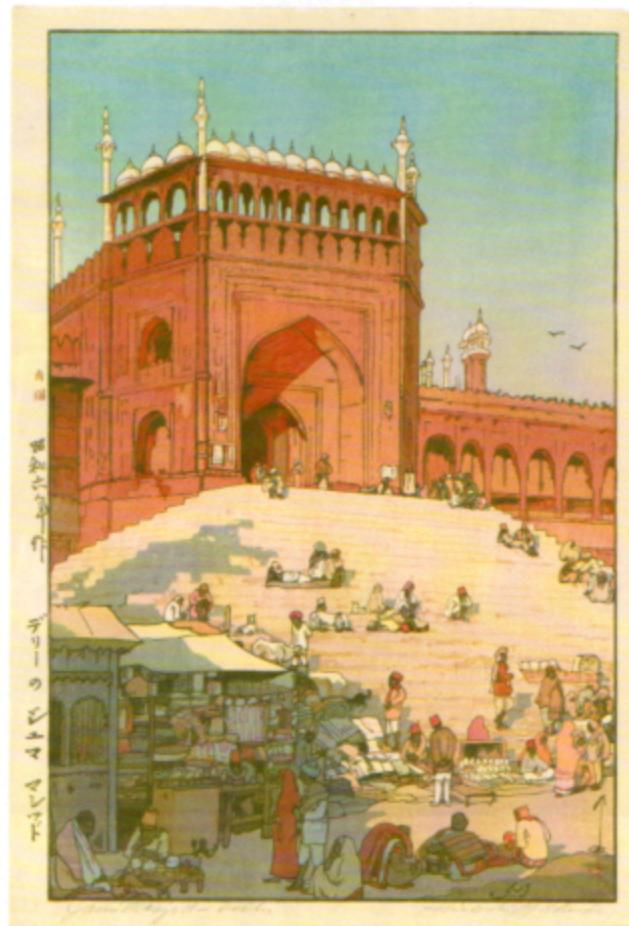


アムステルダム

「日本の版画」美術館を訪ねて

朽木ゆり子
Kuchiki Yuriko



吉田博（1876～1950）
デリーのジュママシッド／1931年

日本の版画 (Nihon no Hanga) 美術館は、

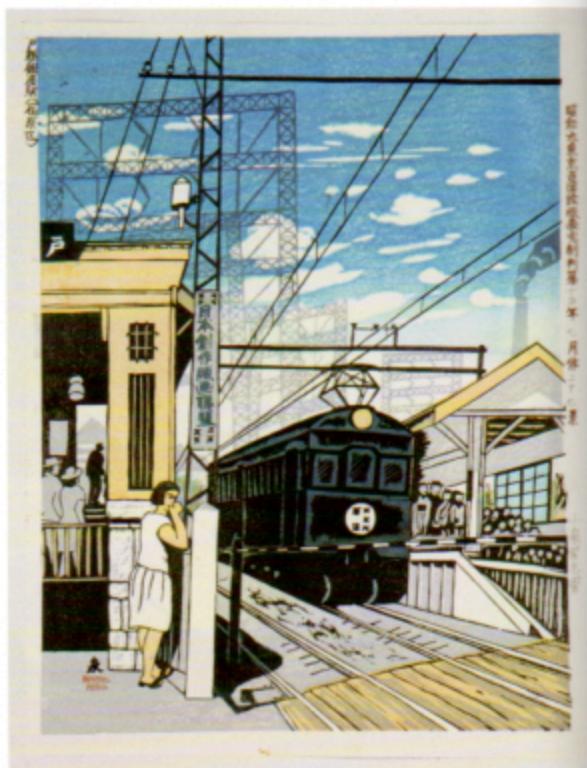
アムステルダム旧市街の運河に面した古い建築が並ぶ瀟洒な住宅街にある。2009年に開館したこの美術館、小さいながらも1900年以降の日本版画約2000枚を保有し、浮世絵の伝統を継承しながらも多様な構図やテーマを開拓する新版画と創作版画の本格的な美術館として、オランダ国内はもちろん、ヨーロッパ各国で注目されるようになっている。

館長はエリーゼ・ウェッセルズさんというオランダ女性。1985年から35年にわたって日本版画を収集してきた。

「最初は日本のお土産を買うつもりだったのです。版画が欲しいと思ったのは、それまでアム

日本の版画美術館の外観





小泉癸巳男（1893～1945）／「昭和大東京百図絵」より

左：三井と三越／1929年12月 右：戸越銀座駅（荏原区）／1940年7月

最初はアドバイザーがいたわけでもなく、ひとりで勉強しながら作品を購入した。横浜や名古屋の版画商を探し当て、作品を見せてもらいました。新版画は見たときに心に響くものがあって、すぐを集めはじめ、その後創作版画も収集するようになりました』

新版画は、伝統的な浮世絵の延長線上にあって、画家、彫り師、摺師、版元が役割分担して製作する作品。一方、創作版画はアーティストがすべての工程をひとりで行う。新版画が理想的な美人画やノスタルジックな風景画を得意とする一方、創作版画は西洋美術の影響を受けて新しい表現を模索し、20世紀前半の都市生活やエネルギーを伝えようとした。近年、川瀬巴水や吉田博、小泉癸巳男といった作家が日本国外で再評価されているが、ウエッセルズさんはその先駆けだったのだ。

楽しみで版画を集めはじめて20年近くが経つた頃、大きな転機がやってきた。それまで住んでいたハールレム（アムステルダムの北西約30キロにある都市）から、アムステルダムに引っ

越すことになったのだ。住まいを探していると、

旧市街の一等地カイザース運河沿いに二軒続きの住宅が売りだされていました。

「その時点で、版画コレクションは約1000枚になっていました。旧市街で条件のいい住宅は滅多に市場に出ないので。それまでは美術館を作ることなどと考えてもみなかつたのですが、二軒続きでないと売つてもらえないという

条件なら、一軒を思いきつて美術館に」と

こうして改築に数年を費やし、2009年の

5月に日本の版画美術館が開館した。ウエッセルズさんは庭焼きの隣に住んでいる。現在は日本語堪能な学芸員もいて、年2回、テーマを決めて展覧会を開催している。

2016年には、アムステルダム国立美術館で、ウエッセルズさんのコレクションで構成

された「Japan: Modern」という展覧会が行われ、大成功を収めた。さらに「日本の近代版画1900～1960 生まれ変わる波」展がジュネーブのバウアー財團東洋美術館（2016年）とパリのカストディア財團美術館（2018～2019年）で展示され、これまた大きな評判を呼んだ。「生まれ変わる波」というタイトルは、ヨーロッパにおけるジャポニズムの原動力ともなった浮世絵が、20世紀に入つて新版画と創作版画という二つの動きとして展開していく様子を「波」と表現したものだ。それらの版画はまた、産業がめざましい進歩をとげ、消費文明や娯楽が大変なスピードで変化する日本の姿を映し出してもいた。

「いま、22回目の展覧会が終わつたところですが、展覧会を自分のコレクションの作品だけで構成するのは、年々難しくなりますね」

終わつたばかりの展覧会は、創作版画家として有名な小泉英志夫（1893～1945）の代表作「昭和大東京百図絵」。小泉はこの作品によって「昭和の広重」とも評されたが、関東大震災から復興する東京の近代的風景を、水彩画のような柔らかい色彩で刷り上げた美しい作品だ。1929（昭和4）年から1937（昭和12）年まで頒布というスタイルで売られたが、1940年には、小泉がシリーズ100枚を特



伊東深水（1898～1972）／時計と美人／1964年



Nihon no Hanga

日本の版画美術館

住所 Keizersgracht 586

1017 EN Amsterdam

The Netherlands

info@nihon-no-hanga.nl

原則として展覧会開催月（5月と11月）の

金・土・日に開館

開館時間 12時～16時／入館料無料／研究者とグ

ループツア（10人以上、25人未満）は随時予約制

開催中の金曜 14時からガイドツアーあり（有料）

<http://www.nihon-no-hanga.nl/>



左：ポール・ビニー（1967～）／

エリーゼの猫／2018年

スコットランド人版画家ビニーによるウェッセルズさんの肖像

上：前川千帆（1888～1960）／

湖の見える空 信濃源訪湖畔／1932-33年

下：竹久夢二（1884～1934）／

宝船／1920年



製の木箱に入れて自筆の序文とともにまとめて売り出した。日本の版画美術館は、3セツトしか現存していないと言われるこの完全版1セツトを保有している。

近代日本版画を海外で紹介した業績で、ウエッセルズさんは2019年に旭日双光章を受章した。1917年にはオランダ国王であるベアトリス王女から、オランダ文化の向上に貢献した人物に与えられる「銀のカーネーション」賞も授与している。

同美術館コレクションの核は2022年にアムステルダム国立美術館に寄贈されることが決まっているが、ウエッセルズさんはその後も日本版画を集め続けるつもりだ。

「例えば、水彩画家でもあった堀潔や、吉田博の息子の遠志のようにまだよく知られていない版画作家がいますし、70年代以降の新しい世代の作品も興味深いです」

日本の版画美術館コレクションはこの先もどんどん発展していくようだ。

くわきゆりこ

東京生まれ。ジャーナリスト

ニューヨーク在住。「フェルメール全点踏破の旅」

「東洋の至宝を世界に先づいた美術商——ハウス・オブ・ヤマナカ」、「邸宅美術館の誘惑」など著書多数。